

日本グッド・トイ委員会からの報告

「おもちゃに社会性が身につけてきた」

多田 千尋

今年度のグッド・トイ100の傾向

「フライパンや包丁が、食卓を豊かにしてくれる生活道具ならば、おもちゃはコミュニケーションを豊かにしてくれる生活道具である」と、ヨーロッパのあるおもちゃメーカーの開発本部長が語ってくれた。

こうしたおもちゃ観には、おもちゃイコール子どもといった図式は描かれていない。赤ちゃんからお年寄りまでの生活文化を高めてくれる道具としての位置付けがなされているのである。

こうした思いを持って、日本グッド・トイ委員会も毎年おもちゃの選考会を開催している。

一九九二年度の「グッド・トイ100」選考会は九月下旬に開催され、教育学者、社会福祉学者、建築家、デザイナー、絵本作家、保母、おもちゃコンサルタントなどの選考委員約一〇〇名に、子ども選考委員約二〇〇名が勢ぞろいした。日本で市販されているおもちゃの中から、一〇〇点だけ良いおもちゃを推薦する、年に一回の選考会である。

玩具メーカー、作家、輸入代理店、地方自治体か

日本グッド・トイ委員会最終選考委員一覧表

氏名	所属	氏名	所属
1 一番ヶ瀬康子	日本女子大学 人間社会学部教授	20 横山 裕	三鷹市立井口小学校教諭
2 乾 孝	法政大学 名誉教授	21 豊泉 尚美	富山美術工芸専門学校講師
3 大田 堯	日本教育学会会長	22 多田 信作	芸術教育研究所所長
4 小川 信子	日本女子大学 家政学部教授	23 尾崎 正峰	一橋大学講師
5 小川 かよ子	建築家	24 正岡 慧子	児童文学作家
6 桜井 里二	老人ホームさくら苑 苑長	25 松樹 借子	清瀬養護学校教諭
7 俵 萌子	評論家	26 千住 栄博	元新宿区教育委員会社会教育課
8 テリー・スザン	こどもの城 国際交流部部长	27 岡宮 町子	中野区青年学級指導員
9 供田 惺	こどもの友社 社長	28 陳 祖信	東京都立大大学院
10 中村 悦子	大妻女子大学 児童学部教授	29 亀田 達夫	主婦の友社通販 本部長
11 中野 正規	特養リバーサイド田名ホーム施設長	30 梅津 朋子	福武書店幼児通信教育部
12 天野 ゆかり	おもちゃ美術館研究室主任	31 阿部 祥子	日本女子大学住居学科助手
13 大井 弘子	人形劇団カラバスマ主宰	32 千葉 和夫	日本社会事業大学助教授
14 松谷 みよ子	児童文学作家	33 草刈 秀紀	世界自然保護基金日本委員会
15 松浦 龍子	やなせ幼稚園教諭	34 馬場 悦子	東京ミュージックボランティア協会
16 丸山 智子	渋谷区立西原保育園保母	35 多田 千尋	おもちゃ美術館研究室室長
17 毛利 子米	小児科医	36 二瓶 健次	国立小児病院 神経科医長
18 山住 正己	東京都立大学 人文学部教授	37 江本 扶抄子	聖母看護短期大学助手
19 山田 美和子	全国ボランティア活動振興センター所長		

ら応募のあった六八七点のおもちゃの中から、音や色が美しく、いろいろな動きをする、丈夫で壊れにくい、みんなと楽しく遊べるなどを基準に、「見る・聞くおもちゃ」「ごっこ遊びおもちゃ」など七部門に分けて選考する。

部門別では、ゲームおもちゃが最も多く二七点。室内遊びのおもちゃの開発に力を注ぐ玩具メーカーの方向性が色濃く出た。相撲やサッカーの人気に合わせて売り出されている「めざせ大関」や「スーパーサッカーDX」。また、毎年着実に人気が高まっているジグソーパズルは、余暇が増えたせい、ファミリーに幅広く受け入れられている。なかでも、エコロジー色の強い「動物たちの地球」や、学習効果もねらっている「パズル日本全図」などのジグソーパズルは特に目立った。

かつては、外遊びおもちゃが主流であった運動を楽しむおもちゃの部門も、室内おもちゃが集中している。赤ちゃんの手の運動を促す「ベビージム」、

九つの的のボールを自由に動かすことができる
「パーティわなげ」など、室内でのおもちゃが目立
ち、おもちゃの側からも、最近の子どもたちの遊び



▲▼ グッド・トイ100選考会風景



の傾向が伺える。
理科学おもちゃは六点。遊びを通してソーラーシ
ステムを学べる「ソーラーカー工作基本セット」や

水の流れを考えながら遊ぶスウェーデン製の「カナルシステム402」などが選ばれた。理科学おもちゃ部門は、応募数、選定玩具数とも年々減る一方である。コンピュータ化、エレクトロニクス化など、おもちゃそのもののハイテク化は目覚ましい限りであるが、子どもたちの科学の目を養うおもちゃの物足りなさを感じる。

市場に出回るおもちゃの中で、日本玩具協会が定めた安全基準にクリアしたおもちゃには、STMマーク（セーフティ・トイ）がパッケージに付けられている。昨年度のSTMマーク認可おもちゃは一〇七〇〇点であった。ようするに、新商品の既製品おもちゃが一万点以上も市場に出回ったということになる。

こうした状況を考えて、日本グッド・トイ委員会は、毎年あふれるように登場するおもちゃの中から、消費者が良いおもちゃを選ぶための「ものさし」作りをしているのである。母親や父親が、子ど

ものためにおもちゃを買い与える目安。障害児施設での子どもの機能向上のためのおもちゃ。老人ホームでの、余暇の楽しみやりハビリとしてのおもちゃ。幼稚園・保育所の子どもの遊びを、豊かにしてあげるためのおもちゃ。このようなさまざまなおもちゃの「ものさし」が、今日必要になってきている。

そして、こうしたさまざまなフィールドで、おもちゃの役割や活用に新たな芽が出始めている。

幼稚園で活躍するおもちゃたち

岩手県盛岡市にある愛育幼稚園は、三つの教室（計二一五平方メートル）を改造し、おもちゃ美術館を開設した。各部屋を「おもちゃ美術館」「お話しと遊びの部屋」「子ども文庫」とし、グッド・トイ100を中心にした約五〇〇種類のおもちゃや、約五〇〇冊の絵本、童話を展示・貸し出している。同センターは、常設展示室、おもちゃの貸し出し

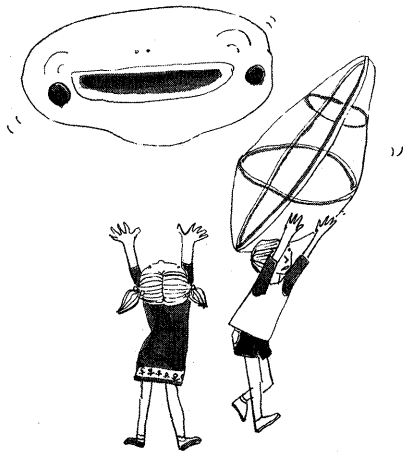
コーナー、世界の児童文庫、資料、文献部門の五部門に分かれており「見る、借りる、遊ぶ、調べる、作る」という五つの機能を備えている。児童教育の専門家、一般に関係なく、誰でも気軽に利用できる。

「おもちゃ美術館」には、グッド・トイ1000の他、岩手県の郷土玩具なども含めた日本の郷土玩具をはじめ、東北地方に昔から伝わる木馬や、イギリスのミニチュア人形、デンマークのブロックなど、木製、金属製、布製など、子どもの夢を育てるおもちゃを一同にそろえ、遊んだり借りたりすることができる。おもちゃのなかには、生活学園短期大学の学生たちが試作した木製のおもちゃ一〇点もあり、学生にとっては実習の場としても活用されている。

また、おもちゃに関する文献を調べることやおもちゃについての相談、手袋や割りばしなど身近な材料でおもちゃを手作りして楽しむこともできる。その他、東北地方にまつわる民話やわらべうた、世界

の絵本を置いて、訪れる人に素朴な児童文化に親しんでもらい、今後は規模を拡大して、児童文化に関する東北の拠点として整備していく方針だ。

幼稚園が、子ども文化活動の拠点をもちことは、



地域文化との相乗効果を生む。地域には公民館や文化センター、福祉会館などいくつかの文化拠点がある。しかし、長い年月の間、こうした施設は、狭い枠にはまった融通のきかない空間になってしまっているところも数多くある。今や、既存の文化施設とは持ち味の違った文化の拠点が、地域に求められ始めている。地域住民の活動意欲に十分答えられる場が必要であり、意外性のあるユニークな企画で、地域を刺激する必要も出てきている。こういった意味で同センターのおもちゃ美術館をはじめ、さまざまな子ども文化活動は評価されるべきであろう。

また、通園する子どもやその父兄にとってのみ意味のある幼稚園の時代は、終わりを告げているのではないか。これからの幼稚園は、地域に文化を提供するぐらいの力量を身につけるべきである。そういった幼稚園こそが、本当の意味で地域に根づき、地域から好感を持たれる教育の場になるはずである。

福祉・医療をサポートするおもちゃ

お年寄りには、むかし蓄えた多くの遊びが眠っている。一方、子どもたちは遊びをたくさん欲しがっている。こうした両者の交流に、おもちゃが潤滑油の役目を果たし始めてきた。

横浜市の特養老人ホーム「さくら苑」には、世界のおもちゃを集めたおもちゃ美術館がある、こどもグッド・トイ100が活躍している。おもちゃを通して、遊びに来る子どもたちとの交流を深め、お年寄りたちの暮らしを豊かにすることが目的である。

地域の住民が訪れることのなかった老人ホームに、子どもたちが学校帰りに立ち寄りようになる。おもちゃのプレイルームでにぎやかに遊んだり、お年寄りから手作りおもちゃを教えてもらったりする。玄関ホールに展示された世界のおもちゃを見るに、赤ちゃんを抱っこしたお母さんも気軽に訪れるようになった。児童や赤ちゃんは老人ホームのVI



▲ 特別養護老人ホーム さくら苑

おもちゃで遊ぶ、お年寄と子どもたち

ちの身体の機能を回復させることもある。音の出るおもちゃでリズム運動をしたり、手作りおもちゃに取り組むことで、動かなかった手が肩まで上がるようになったお年寄りもたくさんいる。

老人ホームにとっておもちゃは、子どもとお年寄りの交流、お年寄りのリハビリ、そしてインテリアといったように、魅力ある生活道具として活用されている。

医療の領域でもおもちゃへの価値観が徐々に高まってきた。

世田谷にある国立小児病院では、さまざまな子どもたちの成長と発達に見合った世界のおもちゃたちが活躍している。ここには全国の病院でも珍しいおもちゃライブラリーがある。長時間待たされがちな外来の子どもたちのために、プレイルームとして利用されたり、子どもたちの遊ぶ姿やおもちゃへの取り組みを観察することによって治療に役立てるといった目的もある。

Pのお客様だ。

また、お年寄りがおもちゃで遊ぶことは、衰えが

「診療室ではとうてい発見することができない、その子本来の姿をライブラリーではかいま見ることができると、指摘する医師もいる。おもちゃを通じた生の情報を治療行為に還元していくシステムができて上がっているわけだ。

おもちゃが送るメッセージ

おもちゃやその使われ方は、その国の、その時代の大人たちが、どのようなメッセージを社会に送っているのかを知る手がかりになりやすい。

お年寄りだけの閉鎖的な社会になりがちな高齢者福祉から、異年齢層との交流を活発にしていこう高齢者福祉へ。入院児をおとなしく、安静にさせることを主導としてきた医療・看護から、遊びを尊重する医療・看護へ。地域との垣根が高かった幼稚園・保育所から、地域住民に開かれた幼稚園・保育所へ。

このように、おもちゃを通して社会を観察すると、さまざまな社会の期待や願いは浮き彫りになっ

てくる。

ヨーロッパのあるおもちゃメーカーは、「子どもにとつて良すぎるといふものはない」というマインドをもって、おもちゃ作りに携わっているという。子どものものであるからこそ「本物」を与えたいという理念の確かさを強く感じる。また、中国の魯迅は「おもちゃを見ればその国の文化が良くわかる」とも述べている。

日本でもそろそろおもちゃに対する姿勢が問われてくるであろう。「こわれ物」、「まやかし物」の代名詞としてのおもちゃ観を払拭し、文化財の一部として考えていかななくてはならないであろう。

(芸術教育研究所・おもちゃ美術館)